

近代スポーツとジェンダー・セクシャリティの政治

日時 2017年11月24日（金）13：00～14：30

場所 千里山キャンパス 尚文館 1階 マルチメディアAV大教室

講師 井谷 聡子（文学部助教）

東京都と日本政府は、「復興五輪」を掲げて2020年のオリンピック招致に成功した。2020年の東京開催が発表された2013年9月は、1990年代から続く経済不況から抜け出せない日本が東日本大震災を経験し、さらに経済格差の広がりや超高齢化社会の到来、東アジアの不安定な政治情勢など、日本社会に重苦しい空気が立ち込めていた。そんな中、招致成功のニュースは、前回の東京オリンピックのレガシーとしての「開発」と高度経済成長という高揚した社会のイメージを想起させ、日本社会が再び世界の表舞台に立ち戻る夢を少なくとも一部の人々には見せるものであった。しかし、新国立競技場の設計や建築費用、熱帯雨林の違法伐採による木材調達、公式ロゴなどをめぐる問題によりその高揚感も低下しつつあるように見える。

東京2020年大会の準備をめぐる政治経済の問題が社会的な注目を集める一方で、オリンピックそのものが持つイメージや「ブランド力」は、あまり失われていないようである。オリンピックの価値を表現するキーワードとして掲げられる「卓越性、友愛、尊重」や、「平和の祭典」としてのオリンピックのイメージを疑う声はほとんど聞こえてこない。また、「スポーツに政治を持ち込むのは悪」という考え方も社会に深く根付いている。

しかし、ジェンダー・セクシュアリティ、人種、民族の視点からクリティカルに近代スポーツ、そしてその祭典としてのオリンピックを考察してきた研究者たちは、近代スポーツが差別を内包、再生産してきたことを長く指摘してきた。また、クリティカル・オリンピック研究が発展してきた近年では、オリンピックそのものの政治性とオリンピック毎に繰り返される女性と性的マイノリティの選手に対する差別、開催都市に暮らす人々に対する人権侵害、民主主義の後退、経済格差の広がり、環境破壊問題を指摘する多くの研究と証言が蓄積されてきている。これらは、オリンピック、ひいては近代スポーツそのものの社会的役割と価値を問い直すもので、東京オリンピックを3年後に控える日本社会において、より活発に議論されるべき問題ではないだろうか。

この公開講演では、ジェンダーとセクシュアリティを切り口として近代スポーツと近代オリンピックのあり方を批判的に検討する。それを通じて、世界で最も影響力を持つ近代スポーツの大会をこの日本で開催することの意味と社会的な影響について参加者の方々と議論を深めたい。

* * *

●聴講無料 予約は不要です。多数のご来場を歓迎します。
手話通訳が必要な場合は、11月9日(木)までに人権問題研究室へご連絡ください。



主催 関西大学人権問題研究室

〒564-8680 吹田市山手町3-3-35 阪急千里線「関大前」駅下車

Tel 06-6368-1182 Fax 06-6368-0081

ホームページ <http://www.kansai-u.ac.jp/hrs>